

ペデ下2号館前、お昼時の「芭菓亭」——。弁当を買いに出かけると、「いらつしやいませ」と、笑顔と控えめな声が返ってきた。ヨトクテ・アンジェラさん。バルト3国の1つ、遠くラトビアからの留学生である。

(学生記者 竹平道郎)

「How do you do?」と舌をもつれさせる必要はなかった。「取材? 私を?」と、とまどいながらも流ちょうな日本語によるやりとりである。やや照れたように、「恥ずかしい」という言葉がつづいた。しばらくして、「でもいいですよ」とOKをもらったのだった。

広い緑のキャンパスが好き

日本語は本国ラトビアで学んだのだそうだ。英語を中学から8年も9年も学びながらロクに話せない多くの日本の学生(ボクもそうです)と

は大違い。ドイツの大学に3年間留学したあと、日本語を専門的に学びたい、新しい学問も、という思いから、中央大学へ。

昨年9月から法学部政治学科に所属して、政治学の酒井由美子先生や若松隆先生のゼミを受講しつつ、また日本語の勉強にも励んでいる。

——中大の雰囲気は?

「芭菓亭」からの眺め ラトビアの留学生 アンジェラさん

「キャンパスが広く、緑に囲まれているでしょう。ラトビアも森や湖が多いんです。だから新宿や渋谷の人混みはあまり好きではない。のんびりしたこの大学の雰囲気気に入っています」

——日本へ来る前の印象と違いがありますか?

「向こうにいるときは、文化の

面でも人々の暮らしの面でも、ヨーロッパとは異なる文化を持つエキゾチックな印象を抱いてました。でもこちらへ来てからは、時間がたつにつれて印象が変わってきました。より深い精神の違いのようなものを感じるようになりました」

——文化の違いを超えて、似ていると感じることは?

「慣れない習慣が多すぎて、似ているところまではなかなか目がいきません」

驚きが先立つ日々のようだ。

ソ連邦離脱—独立は15歳の時

アンジェラさんの母国、ラトビア共和国は、バルト海に面して、エストニア、リトアニアとともに「バル



ト3国」と呼ばれる。人口約250万人、面積6.5万平方キロの比較的小さな国家。1991年のソ連解体により独立するという激動の歴史をもつ。旧ソ連時代は電話交換機の主生産地として知られた。最近では、NATO(北大西洋条約機構)への加盟問題が話題となっている。2000年日本大使館開設。首都リガと神戸は姉

妹都市を結んでいる。

独立によって人々の生活は大きく変わったが、必ずしもよい点ばかりではなかったようだ。

「社会主義から資本主義へと経済が変化しましたが、失業者の問題も出てきて貧富の差は大きくなりました。いろいろな見方ができますが、ある意味では独立前の方が生活は楽

だったともいえます」

ちなみに、アンジェラさんが歴史的なラトビア独立に立ち会ったのは、15歳のときだった。

エキゾチック中大

彼女がアルバイトで「芭菓亭」に立つのは月曜と火曜日。売り上げ数字もいいらしい。

お弁当を売りながら驚いたこと。まずは学生の多さ、そしてヨーロッパとの食事風景の違い、という。

日本の大学では昼休みになるとみんなが一齐に食事をとる。お弁当の店も食堂も混みあうのは当たり前。光景だが、不思議な気分がするらしい。「中大に来る前に通っていたドイツの大学では、学生はそれぞれ空いている時間に食事をとるので、日本ほど食堂が混雑することはありません」

肉類と魚類ミックスのメニューの取り合わせもヘン。「これはとても慣れることはできません！ヨーロッパでは、肉は昼に、魚は夜に、など必ず分けて食べます。いっぺんに食べたらず胃が働かなくなってしまう」と、笑う。

日本人が食べる「洋食」は、細かい点ではやはり西欧とは違う「日本オリジナル」のようだ。

日本の学生は、知らない相手に話しかけるときは、無難な話題を選ぶ。例えばまず相手の年齢・学年・学部を聞いたり。しかし、この習慣もなかなかなじめないことらしい。だから、「日本の学生と親しくなるのにとっても難しい」そうだ。

「恥ずかしがり屋のせいもありますが」と肩を持ち上げるしぐさをしているから、「私が人と親しくなるときは、まずそのひとの性格や雰囲気に興味をもつので、年齢のことなどはあまり関係ありません。聞くとしたら、親しくなって時間がたつてから、ヨーロッパでは性別に関係なく、また年齢が10歳上でも下でも友達になりますよ。でも、日本ではそうでは

ありません」。

「古池や…それを知っている」

日本の学生気質の理解はなかなか

大変なようだ。日本の文学は彼女のお気に入りだ。とくに明治から大正、昭和にかけての作家が好きで、川端康成の『雪国』や芥川龍之介の『羅生門』などの作品を読んだという。

ここで恥をさらすのだが、ウカツなことに、ボクは「芭菓亭」を「芭菓亭」と思っていた。それで松尾芭蕉について知っているか、とたずねたのである。「古池や…」と口ずさむと、「それ知ってる！ 俳句も大好きです」と、一番の笑顔で喜んでくれたのだけれど。

寺や神社といった伝統建築も「時代の重みを感じさせる、落ち着いた雰囲気がい」からお気に入りだ。鎌倉大仏も見に行った。いずれは京都へも旅行してみたいという。

中大を2年間で卒業することがひとまずの目標だ。「それまでは、遊

びはひかえめに、日本語の勉強に励みます」。他の大学でドイツ語を教えるもいる。小柄ながんばり屋さん。

インタビューの終わり、アンジェラさんは、ぼつりと言った。

「緯度が高いので、ラトビアの夏はなかなか日が沈まない。夜の11時まで明るいんです。そんなこと思うと、懐かしい」

遠い目になる。

外は、日本の初夏の夕暮れ。

